

芸能の流転

—— 説経節の場合 ——

秋 谷 治

はじめに

漫才——こう書くのはもはや時代遅れで「マンザイ」或いは「お笑い」と書くべきかも知れないが、基本的には「漫才」と呼称していた芸のあり方の粋をまだ大きく外すものでないであろう——は昭和初期（昭和8年説と9年説とがある）に今を時めく芸能プロダクションの吉本興行の幹部が、すでに二人で時事のネタのしゃべくりを中心に様々な芸をとりこんでいた「万才」に対し新たに命名したものと伝えられている。横山エンタツ・花菱アチャコの二人がこの頃の代表者であることはよく知られていよう。洋服姿で立って時事を捉えた話題の会話を行なう今に通じる新しさを持ちこんだ。逆にそれまでの祝福芸の面を失った。「万才」は明治後半に江州音頭という歌をもとにおかしく聞かせていた玉子屋円辰が愛知県の「萬歳」をとり入れ、和服で鼓を持ち太夫・才蔵と呼称し、掛け合いの世間ばなしのしゃべくりと様々な芸をとりこんだ芸づくしを行なっていた（小島貞二『漫才世相史』毎日新聞社、昭和40年）。更に遡って「萬歳」は正月に祝福芸として祝言を唱えに訪れてくるもので、整ったものとしては御所や公家、幕府、大名邸に伺候し、また門付芸として町家を訪れる太夫才蔵という二人連れの来訪神信仰を元にした芸能で、室町時代頃迄は「千秋萬歳」と称し、『古今著聞集』などの平安時代の文献に迄遡りうるものであった¹⁾。

すなわち（千秋萬歳から）萬歳、万才を経て漫才へと変化してきた芸能であり、まんざいという発音は変えずに漢字を変えるのみで、一貫してきたものと時代に応じて変化してきた意味あいとを伝えた命名の変遷史でもあった。最も大きな変

化は信仰を元にした祝福の芸であった性格が、万才となった明治以後急速に変化し漫才になった時には全く失われてしまったことである。古態を留める萬歳²⁾も昭和40年代迄は関東地方に回動していたが、獅子舞や御師が来なくなったのと同じく殆ど見ることができなくなってしまった。こうして千年以上の歴史があった萬歳は一変したものの、人々を喜ばせる芸能として二人一組で行なうあり方は強靱に続いている。ともかく大衆芸能はこのように世に連れ人に連れ変化していく。また影響しあっていく。

安寿と厨子王の物語は子供の時、どこかで知る機会のあった方も多いであろう。あの物語が最初に語られたのは説経節という芸能においてであった。いつ頃始められた芸能か定かでないが、室町時代頃と推定されている。この芸能が今日も多摩地方他で伝承されている。漫才の人気のような勢いが無いのは残念なことであるが、寺社や宮廷あるいは大名等の庇護を受けることもなく500年にも亘る歴史を持っているのは大衆芸能の一つとして希なこととしかいえない。むろん時とともに変化してきた。そうした歴史を若干ふりかえりながら、今日も伝えられている説経祭文系の説経節と愛知県に伝えられている説教源氏節との関係を詞章の上から寸見し、それらの歴史の一端を垣間見てみたい。

1

説経節は説経と書いて説教と書かないが、僧侶が説教を説いたように、仏教の法談・唱導から生じ、寺院の周辺で成立したというのが通説である。仏教の比喩や因縁話を物語化し芸能化したのが出発点であったろうが、その転化・物語化の過程は全く明らかでない³⁾。初期のテキストには、例えば安寿と厨子王の説経節『天下一説経佐渡七太夫正本 せつきやうさんせう太夫』の冒頭には

たたいまかたり申御物かたり、國を申さは、たんこの國、かなやきぢざうの御本ぢを、あらあらときたてひろめ申に、これも一たびは人げんにておはします（以下略）（横山重編『説経正本集 第一』29頁 角川書店 昭43年）

とあり、丹後国（京都府）の金焼地藏という仏が地藏仏として祭られるに至った経緯の大体の話を説いていく旨の説明がなされている。末尾には

みねにみね、門にかとをたてならへて、ふつきはんぶくとおさかへあるも、
なにゆへなれば、おやかうかう、かなやきぢさうの御ほんちを、かたりおさ
むる、すゑはんじやうものかたり(同書45頁)

とあり祝福の言辞をもって結んでいる。首尾において宗教色信仰色で色どられて
いるが、本文の内容においては説教がなされるでもなく宗教的色彩は薄く、艱
難辛苦の物語の果てに厨子王が母に巡り会える筋が描かれるのみである。江戸時
代より前においては漂泊の芸能で寺社の境内や門前で語られるものだったので、
上例のように若干の宗教色もみられたのであるが、江戸時代になると、人形芝居
として今日の文楽のように人形(但し一人で操る一人遣い)と三味線と語りの三
つの芸能が合流して京・大坂(私注 江戸時代にはこの字を用いた)・江戸で主
に上演されるようになると、上例のような首尾の詞章がさらに簡略化され、つい
にはなくなり、物語の部分のみになる。都市の興行に固定し、漂泊性が失われた
と同時に宗教色も失われてしまった。

引き換えに固定した都市の観衆が増え、テキストの出版が可能になった。400
年近くも前の大衆芸能であるにもかかわらず、今日我々がテキストを読むことが
できるのは、そのためである。語り手が違う、したがっていくつかのヴァリエー
ションを比較検証することも可能になるテキストが度々出版された程の観衆がいた
ことも知れる。寛文・延宝期(1660年代70年代)迄が最盛期で他の古浄瑠璃と
呼ばれる語り物の人形芝居とともに、近松門左衛門と竹本義太夫による義太夫節
人形芝居(今日の文楽)が貞享元年(1684)に始まると淘汰されていった。宝暦
10年(1760)には「いたはしや浮世の隅に天満節(私注 天満八太夫が語り出した説経節)」
といわれるように衰退した。

ここで絶えてしまっていれば森鷗外『山椒太夫』は生まれなかったかもしれない。
また我々も安寿と厨子王の悲劇を知ることにならなかったかも知れない。幸
いにも三通りの道筋が説経節にはつけられた。一つは佐渡ヶ島に伝えられ近年ま
で語り伝えられていたのである⁴⁾。二つ目は後述する説経祭文として寛政年間
(1789-1801)に再興された説経節が多摩地方・都内・埼玉県秩父地方に今も伝
えられている。三つ目は他の芸能に影響を与えていた。

この三つ目の経過と道筋について煩を厭わずに挙げてみると、「小栗判官」という説経節は近松門左衛門『当流小栗判官』・紀海音^{きのかいおん}『鬼鹿毛無佐志鑑』・文耕堂他『小栗判官車街道』^{くるまかいどう}等の文案や歌舞伎に作られ、大坂の正月歌舞伎興行には江戸の曾我狂言のように小栗物が上演されたという。大坂から南下して熊野本宮に向かう熊野街道は、主人公小栗判官が地獄から腐ったような体で甦った後、その体を癒すために土車という一種の車椅子で連れられていく道であったので、別名小栗街道とも呼ばれるに至った。

「苺萱」は『苺萱桑門筑紫轢』^{どうしん いえずと}『苺萱道心行状記』等の文案に（前者は歌舞伎で今も上演される）作り変えられ、曲亭馬琴は『石堂丸苺萱物語』を書いている。他に合巻・黄表紙等の草紙紙にも影響した。今日でも高野山の苺萱堂では絵解き（僧侶が絵を見せながら物語を概説し、教訓を加える）がなされ、絵本や漫画本まで売られている。石童丸の物語として戦前までは国民伝説のような位置を占めるものであった。民謡や盆踊り唄（例えば東京の佃島）に採り入れられていることもある。長野市の善光寺の近くに苺萱・石童丸親子が地蔵仏として祭られたと物語にあるので、近くの西光寺・往生寺の二寺がその地として絵解きが今もなされている。

「山椒太夫」は文案に『山椒太夫恋慕湊』^{れんぼのみなと}『山椒太夫五人嬢』^{むすめ}『由良湊千軒長者』他があり最後の「千軒長者」は歌舞伎で今も上演される。森鷗外『山椒太夫』はいうまでもない。

「信徳丸」は近松門左衛門『弱法師』^{よろぼし}、菅専助^{せつしゅう}『摂州合邦辻』^{がっぼうがっつじ}になり、後者の主人公玉手御前の人形の写真は文案の本はもとよりよく掲げられる。大阪天王寺にはこの話に因んだ閻魔堂が作られてさえる。

「信太妻」は竹田出雲^{あしや}『蘆屋道満大内鑑』^{どうまんおおうちかがみ}に作り直されて、これが有名になり説経祭文に逆戻りしている。清元『保名』^{やすな}は名曲として名高く舞踊でもよく演じられる。このように、古い説経節は衰えたが、江戸の文芸・芸能に多大な影響を及ぼした。説経物は信仰色を失う一方で流転しながら活き続けていたのである。

2

第2の道は享和の頃(1801-04)もしくは文化の初(1804-)薩摩若太夫が山伏の祭文語りの伝えていた語りを説経祭文として復興させた道である。この初代若太夫から二代目(ないしは三代目まで)江戸の芝居町で説経芝居を上演し、台本も33段51冊あるような正本でも出版され市販されていた。「説経さい文小栗判官・照手姫」は天保から弘化期(1830-1844-1848)にも再々刊行されており、版元を変えて出されたものもあり版元は6種数えられる(森中治兵衛・和泉屋栄吉・吉田屋小吉・松坂屋吉蔵・積玉堂・丸吉)⁵⁾。また天保15年(1844)より弘化4(1847)年の間に当時一流の三代目歌川豊国によって小栗判官が鬼鹿毛という荒馬を乗りこなす錦絵が描かれ、当時の人情本の第一人者の作家松亭金水により賛が加えられるまでにいたっている⁶⁾。江戸後期の説経節である説経祭文の絶頂期であった。

名古屋の芸能について記録された『見世物雑誌』の天保6年(1835)閏7月15日より大須山(観音で有名、現在でも有名な演芸場のある地区)で山門外講釈小屋で「祭門説経」があり、江戸の「秀元」と「きく」が

小栗判官一代記

由良湊三座太夫

かるかや石とう丸

八百屋於七一代記

一の谷八しま

かけ清ろう屋

あしやとうまん

法道尼

二人尼

神徳丸

を上演している。これらの外題は誤記や宛て字があるものの対応する作品の正本や台本が関東各地の太夫の元に残されており、説経祭文の演目として誤りはな

いであろう。これらの演目が天保6年には既に成立していたことが確定できる。「秀元」「きく」の名はこの書以外（後述）他見なくどのような語り手であったのか、費用・給金等の詳細はもとより諸事情についての記述が全くないので手掛かりもない。同じく天保8年2月14日より若宮境内北之方にて「世津きやう上り 江戸 春太夫」が公演している。「春太夫」の名は早稲田大学演劇博物館所蔵『説経さい文 三莊太夫物語』第34段「安寿姫対王丸骨対面段」より第36段「太夫親子 鋤挽段」までの4段、『説経祭文 石童丸 苺萱道心』第5段「行違段」・第7段「萱堂段」及び同博物館蔵『説経さい文 出世景清』上ノ切「阿古屋自害」において太夫名の10番目に見出せる。これらの諸本間においては他の10余名の太夫名が一致するので同一人と考えてよいであろう。名古屋の記録の春太夫とも同一人と仮定するならば——同時代に10番目に位置づけられる名を別の土地でさえも名乗る他の者がいたとは考えにくく、上位に位置する名ならばそれを襲う者がいたことも考えねばならないが——天保8年の前後数10年の内に上記3本7巻が版行されていたと推定できる。もう少し狭められるとよいが、目下は江戸から単独で語りにきた太夫がいたことに留意しておきたい。彼の逗留が一時的なものか、江戸を既に離れ地方で活動しはじめたことを意味するのか、この1項目の記事のみでは即断できないが、慶応元年（1865）『門弟連名控』（八王子市郷土資料館蔵）及び明治6年（1873）書写「説経語り渡世弟子名前書上写」⁷⁾にないことも留意しておきたい。『見世物雑誌』には同じく天保8年5月に大須で「せつきやう」があり「開元 秀元 鶴元 龍元」の4名の名が記されている。前述の天保6年の10外題を掲げていた「江戸 秀元」と同名が挙げられている。

この3例は江戸から上ってきた太夫が説経祭文（説経浄瑠璃も同じものをさし、江戸で出版された正本に両方が用いられてある）を名古屋で上演していたわけであるが、これらは江戸の最盛期の余勢を駆ってのためであったろう。

3

安政2年（1855）10月2日江戸は大地震に見舞われた。その実態は『武江年表』をはじめ諸書に記されているので今は触れない。この5年前頃から猿若町（浅

草観音裏にあった芝居町)にあった人形操りの薩摩座と結城座は不振で取り壊されていた。薩摩派の説経節においても困窮の度を深めていったことであろう。嘉永4年(1851)8月に上演された三世瀬川如皐作『東山桜莊子』は義民佐倉宗五を主人公にしたもので人気を呼び、宗五物の様々な作品がこれを契機に作られたという。埼玉県所沢市柳瀬民俗資料館蔵の薩摩若太夫正本『桜草語 浅倉当吾内乃段』『同 浅倉川渡場の段』⁸⁾もその主人公名浅倉当吾が『東山桜莊子』のそれと一致するので恐らくその影響下になるものでであろう。「説経浄瑠璃」と表紙に刷られているのも三代目若松若太夫(小若太夫改め)氏の推測どおり、比較的新しい版行の正本で、嘉永4年8月以降の刊行とみてよいであろう。しかし困窮を窮めていた薩摩派にとって『東山桜莊子』の時運に乗ることは極めて適切な機会だったのではないだろうか。安政大地震を予知してはいなかったであろうが、それより前ならば可能であったと臆測を逞しくする。

ところで、大地震に関連してより注視してみなければならないことがある。安政2年と3年に三代目薩摩若太夫は数回に亘り秩父入りし三峯神社に参詣し柴原(荒川村日野)の鉱泉宿に逗留し⁹⁾、地元の百姓坂本藤吉を弟子にし、後藤吉は江戸に出て若太夫の下で修業し、薩摩若登太夫と名乗り、帰郷後秩父に説経を弘め、若松佐登太夫他を育てていったという。地震の直後(安政2年の逗留も地震の直後とみるならば)三代目若太夫は再三秩父に滞在したわけであり、江戸で立ち行かなくなったためという伝承も裏付けられよう。

早稲田大学演劇博物館に『義経奥州落』と題する4冊改装合綴の1本がある。前に『安宅関之段 上下』2冊、後に『勧進帳之段 上下』2冊となっている。この後の2冊は表紙の右側に刷られた太夫名が他の正本と較べて大きく異なっている。上冊には「若太夫、辰太夫、小磯太夫、滝太夫、米太夫、津簾太夫、若登太夫」(私意に薩摩を全て略した)下冊は「若太夫、若佐太夫、玉太夫、島太夫、今津太夫、八千代太夫、若勢太夫」(同上)と他に類をみない太夫名である。それのみならず「若登太夫」の名が目を魅く。秩父の若登太夫が参加しているのならば、安政3年以降の正本ということになる。前の『安宅関之段』には若太夫他浜太夫、君太夫、栲太夫等の正本によく刷られている高足達が刷られているのと

大きく異なり、しかも『安宅関之段』の末尾の詞章と『勸進帳之段』の冒頭部の詞章は重複している不自然さがみられる。おそらく別々に出版されたものであろう。そしてこの2本の出版の前後で、太夫が大きく入れ替ることがあったのではなかろうか。(この合綴された巻末に本文と異質の遊紙が一丁附され明治9年の年号と磐城国川辺村の「小針 主」という署名がある。)

この太夫名の一新に関して想起したい伝本がある。国文学研究資料館所蔵『説経祭文』(請求番号ナ7-20)という合綴された刊本集の中に『説経さいもん 小栗判官てる手姫 清水のだん』がある。この表紙の右3行には「若狭若太夫 同浜太夫 同榊太夫 同伊世太夫 同三保太夫 同千賀太夫」と6名の太夫と「三弦 辰治 桑吉」の2名が刷られ上部に「江戸元祖」と周りに配字した丸に隅立て四ツ目の紋が刷られている。既に考察したことがあるようにこの紋は薩摩派の門弟が用いるものである¹⁰⁾。したがって若太夫を名乗るものの家元の薩摩若太夫でない若太夫が新たに出現したことになる。しかも他の5名及び三弦の2名は先に春太夫について示した正本に共通する太夫名三弦方名である。不可解な伝本であるが、この合綴本の裏表紙見返しに、安政5年(1858)に龍野の某(墨で消してある)が求めた旨の記がある。後述するように大坂で版行された本を合わせ綴じているので兵庫県龍野市に元所有者がいたというのは理解しやすい。安政5年以前に大坂で刊行された説経祭文があったということは、一過性の興行のために出版されたというよりも、一時的であったにせよ、大坂に新天地を求めて主だった太夫が総移住したことを示していないであろうか。それ故、『勸進帳之段』の三代目薩摩若太夫を固める太夫が新しい面々に変っていたのではないだろうか。安政大地震の前後どちらも推測しかねるが、三代目が秩父に長逗留したこともあると伝えられるのも、このことと関係があるのかもしれない。家元の権限は三代目にあつたので、大坂の若太夫は家元の紋を掲げることもできず、また大坂に近い若狭の名を名乗ったのであろう。因みにこの正本は早稲田大学演劇博物館蔵の『説経さい文 小栗判官照手の姫』(請求番号ニ13-13)の第21段と一二の語句の手直しをしているものの大異はない本文である。

更に国文学研究資料館所蔵『説経祭文』本は『説経さいもん 小栗判官てる手

姫 清水のどん』に続いて太夫名・三弦方名や紋も刷られていない『新板江戸むかしばなし小ぐり一代記 説経祭文 よろづやの内』廿段目上の巻及び『新はん 江戸説経祭文 むかしばなし小ぐり一代記 萬屋内下の巻』という2冊が綴じられている。先の早大本と比較すると、上の巻は前半ほぼ同文であるが後半部が4分の1刻まれていない。照手姫が主人の万屋長右衛門に嘘をついて遊女になることを拒む件であるが、なくても下の巻があれば差し障りはない。下の巻は冒頭に繋ぎの文句が2行新たに追加された他は大異はない。太夫名が一切ないので即断しかねるが「江戸説経祭文」と銘記されていること段数表記も早大本と一致することから、若狭若太夫の正本の可能性が高いと推測する。なぜ太夫名を一切省いたのか不明であるが、大坂は小栗物を正月の狂言として歌舞伎で上演されることの多かった土地であったので、小栗判官一代記を重視して出版したのであろう。目下のところ大坂における説経祭文の正本として伝わっているものはこの3本なので、これ以上の若狭若太夫他の動向は一切不明であるが、若太夫の一向が大坂に齎たらしたものは説経祭文の歴史においては多大なものであったと考えられる。この若太夫に刺激されて新内を語っていた大坂の岡本美根太夫が「説経祭文」を語り始めたのである。

4

前述国文学研究資料館蔵『説経祭文』(請求番号ナ7-20)は縦14.5cm、横11cmの合綴本で後表紙がつけられた1冊本である。裏表紙見返しには先述のように安政5年龍野で得た旨の記がある。内容は『説経祭文 岡本美根太夫章 出世かげ清獄屋破之段』上の巻・中の巻・下の巻、『岡本美根太夫章 江戸説経小栗照手姫 再の対面』上・中・下、『岡本美根太夫章 江戸説経由良の湊千軒長者内之段 三莊太夫』、『岡本美根太夫章 江戸説経さいもん石どう丸』上、『岡本美根太夫章 石童丸荊萱道心行違段』、『江戸説経高野山 荊萱石堂丸札書ノ段』中、『岡本美根太夫 江戸説経かうやさん衣掛のどん 石堂丸ものがたり』下ノ畢、次に先述の若狭若太夫正本『説経さいもん 小栗判官てる手姫 清水のどん』、『新板江戸 むかしばなし小ぐり一代記 説経祭文 よろづやの内』廿段目上の

巻、『新はん 江戸説経祭文 むかしばなし小ぐり一代記 萬屋内』下の巻、『岡本美根太夫章 江戸説経 ゆらのみなと千げん長者 三莊太夫初編』上下巻、以上10種15冊59丁である。

岡本美根太夫の正本が大半であるが、岡本美咲太夫の正本が1冊、若狭若太夫の正本が3冊、上記の順で綴じられてある。この本の所有者、龍野の某氏またはその前の所有者にとって、どれにも江戸説経祭文と刷られているのでどの本も大差はなかったので何の秩序もなく綴じておいたのであろう。そのように外観は似ているが、美根太夫の本文は薩摩派の本文と大いに異なる。また節は新内を標準にしたものであったので江戸の説経祭文とは異なっていたといわれている。なぜ美根太夫が自らの派も江戸説経祭文と称していたか臆測すれば、若狭若太夫のそれが人気を呼んでいたからではなかったろうか。テキストを取りこんだ時、名称のみ残し、内容は換骨奪胎してしまっている。説経祭文の詞を元にしたのであろうが対校するのは困難なまでに詞章を変えている。「小栗判官」に例をとれば、光重こと小栗判官が甦った後、再び万屋長右衛門のところへ向い、餓鬼阿弥車を引いてくれた小萩に礼を述べに訪れる件で、

『岡本美根太夫章 江戸説経 小ぐりてる手 再^{にと}のたい面』中巻に

小はぎこそ、かをにゆふひのあかねさし^{をそ}恐れながら申あげ^{ます}升^{とのさま}お殿様、お主^{しゆ}の
仰^{をよせ}かおもきゆへ、おさゝのおしやくにでましたが、せんぞ^{せんぞ}のりやさんげば
なしにいでません、おきにいらずばさがりましよ、光重^{みつしげこうきこしめし}公聞召、おし一代
のあやまり也、人^{ひと}の先祖^{せんぞ}をとふときは、わがいにしへ^{もの}を物がたり、それより
聞^{きく}のがほうぎなり、

とあるところは、数少なく近いところである。薩摩若太夫正本第32段

『^{たいめんのだん}対面段 下』

仰^うに姫^{ひめ}君^{きみ}、おもてを上^あ、是^{これ}はしたり、お国^{くに}主様^{しやう}の、仰^う共存^{くぐん}じませ
ぬ、私^{わが}は主^{しゆ}めいにまかせまして、御酒^{ごしゆ}のおしやくには出ましたが、我^{われ}身^み
の上^{うへ}のさしきさんげにや、出^でませぬ。もはやおいとまたまわれと、すで
に御前^{ごぜん}をたゝんとす、判^{はん}官^{くわん}、もすそをひかへ、ア^アレ^レまで小はぎ、人^{ひと}の
せんぞをとふときは、我がいにしへをかたれと有^あ、そちが名をといしは、

判官^{みつ}光しげ一ツツのあやまり、

ここでもう一本、美根太夫系の太夫岡本松蔭齋の筆写した『実道記貞女鏡 小栗照手対面乃段』という尾崎久弥氏旧蔵・蓬左文庫所蔵『蓮如上人啄をどし 石井高尾状つかひ 小栗照手対面の段』(請求番号尾25-150)という合綴本の同じ箇所を掲げる。

ををせに照手は^{あらた}ざを改メこうべをさげ、コレ^{あまる}みようがに余おことバにハござり升れど、わたくしハ、ごぜん様のぎよふいと、しゅう人のことバがおもきゆへ、ぜひのうおしやくにハ出ましたなれど、身のざんげんばなしをいたしましよふとて、これへいでハいたしませぬ、モウ此ざハ御めんなされて下さりませと、すでにたち上らんとなし給へバ、いつてきたんりょうのみつしげどの、そバなるせんすを手にとるやいな、^{うち}打かけのすそ、しつかとおさへ、^{ハレ}まで小萩、へいはんぐわんみつしげが目どをりともはじからず、立さわいでびろうであらう、まてと^{いは}言バ、まあまて、^{ハア}、なるほど、人の先ぞをきくときハ、わがいにしへをかたれとやら、

というようにこれでも比較がなしうところである。三者とも同趣旨であるが異なっている。そして三者の本文の特徴がよく表れているところである。どれも会話の文に詳しく、くどさがあるが、松蔭齋の文章はもっとも長くなっている。美根太夫の文章はこの件には表れていないがお金をお礼に渡そうと幾度もでてくる。三者とも根は繋っているのが親子関係を指摘できる詞章は殆ど見あたらない。このように美根太夫は江戸説経祭文と名乗りながら、若狭若太夫が薩摩の正本をほぼ逐字的に版行していたのに対し、独自の本文を作っていたのである。語りも新内を元にしたものであったから、美根太夫は説経祭文に刺激を受けながら、別の語り物を志向していたのである。それが名古屋に移され、平曲に対抗して名付けられたという説教源氏節の成立であった。尾崎久弥氏『名古屋芸能史』によれば明治初めに「説教源氏節」と称えられたとあるが、内実は別の語り物であったのであるから改称は当然の道程であったであろう。そして先に掲げた岡本松蔭齋は説教源氏節の中興の祖として崇められる語り手であるが、美根太夫の大坂での弟子で名古屋に移り住み名古屋の源氏節の興隆に資したのである。師

に習い、独自の詞章を一層すすめた攻めの姿勢が興隆にプラスに作用したのである。源氏節は明治後期に東京に進出するまでに至り、源氏節女芝居として警視庁から禁止される程であったという。

ところで、尾崎久弥氏は重要な紹介をしている。尾崎氏蔵の小寺玉晁編『嘉永三戌正月ヨリ同六丑歳十一月迄 戯場番附』の嘉永4年(1851)9月の項に
九月より清寿院境内にて

説経祭文

新内ぶし 岡本美根太夫

岡本美喜松

岡本美喜□

と記しているという¹¹⁾。先に述べたように岡本美根太夫が若狭若太夫の大坂での活躍に刺激を受けたものならば、若太夫の大坂行きは嘉永4年(1851)以前となる。安政5年(1858)以前に正本を刊行していたことも7年以上引き上げねばならなくなるのであろうか。尾崎氏の論考に盟友市橋鐸磨氏が説経祭文の名の32段33冊を所持していたという。この本や大坂刊行の版本の出現が待たれる。なお、安政4年(1857)8月より10月迄名古屋若宮境内芝居として岡本美矢登太夫他による説経新内の「小栗判官」他が上演され、その番付が早稲田大学演劇博物館にあることも想起しておきたい¹²⁾。ここまで年代的に判明したことを整理しておく。

天保6年 名古屋で説経祭文公演(秀元)

(1835) 上述作品(第2章)はこれ以前に成立

同8年 名古屋で説経祭文公演(春太夫)

(1836) 薩摩浜太夫・同樹太夫・同伊世太夫等を記す諸正本は、この前後数十年の成立、これらの太夫の活躍時もこの頃になる。

嘉永4年 8月以降説経祭文『桜草語』成立

(1851) 9月名古屋で説経祭文を新内節で公演(岡本美根太夫)

この美根太夫が大坂で説経祭文を仕入れたのならば、若狭若太夫・同浜太夫・同樹太夫・同伊世太夫他の移住はこれ以前になるか。

安政2年 10月安政大地震

(1855) 三代目薩摩若太夫大地震の影響で秩父へいったか。

同3年 三代目薩摩若太夫秩父へ逗留

(1856) 『勸進帳之段 上下』はこれ以降の出版か。

薩摩辰太夫・同小磯太夫・同若狭太夫・同玉太夫・同若登太夫他が
辰太夫以外新しい太夫として登場。

同4年 名古屋で説経新内公演(岡本美矢登太夫)

(1857)

同5年 これ以前大坂で若狭若太夫が小栗判官を刊行。

(1858)

5

名古屋の説教源氏節においても「小栗判官」はよく上演された。松蔭斎は38段13冊の口伝の正本を旧尾崎久弥氏蔵・蓬左文庫本に残しているが、その中に3段小栗物が含まれている。しかし、それらは先に紹介した二度対面の段の前後二種であり、他の章段はない。美根太夫の正本においても同様に現在伝えられている源氏節の正本には他の段が全く見られない点にも留意しておくべきであろう。若狭若太夫は清水の段と万屋の段を遺していたのであるから、これらの段も大坂には伝わっていた。但し全33段はどうであったか定かでない。

現在、もくもく座が源氏節人形芝居を復活させているが、この元になった正本や音源は愛知県海部郡甚目寺町の故六代目岡本美寿松太夫(服部松次氏)所蔵のものである。氏の語られる『小栗判官照手姫 本陣入小萩説話段』は松蔭斎の正本『小栗判官照手姫 萬屋本陣入の段 全』に基づいている。前半分に8丁分の省略があるが、ほぼ逐字的に対校することができる。松蔭斎のくどきを省きすっきりさせている。しかしこの一つをもってしても松蔭斎の影響の程がしれよう。

説経祭文から影響されて説教源氏節が成立したが、それは従属的な影響でなく、当初から独立した別個のものとして成立したといってよい。それ故今日迄命脈を保っているであろう。

後期説経節である説経祭文はこの他、様々な芸能に影響を与えた。幕末から明治にかけて東京八王子市の車人形、埼玉県横瀬の人形芝居（回り舞台の機構をもつ）、同荒川村白久の串人形が考察され、写し絵（スライド映写機を幾台も同時に使用し、二重に仕掛けたフィルムによるアニメーションの先駆、近年イギリスやイタリア他でも注目され始めた）の地語りになり永続化させるのに資した。近年劇団みんな座がさらに工夫発展させている。又越後の^{こづ}警女の主な演目である祭文松坂に撮り込まれ漂泊の芸として近年迄楽しまれた¹³⁾。神奈川県^の伝説や念仏唄にまで溶け込んだ¹⁴⁾。また浪曲の源になったともいわれ、多様な芸能を生み影響を及ぼしてきた。前期の説経節が江戸の文学や芸能に大きな影響を与えたように、後期の説経節も地方の芸能に大きな刺激を与えたのである。本家の説経祭文系の説経節も昨今若手の語り手が増え始めて期待を抱かせるが、安住したり保守的になっては先々望めないであろう。芸能は流転していくものであるから。

- 1) 南博・永井啓夫・小沢昭一編『ことばぐ——萬歳の世界——』（『芸双書』第5巻 白水社 1981年）に学術的・詳細に、これらの歴史的変遷を説いている。またこの本の永井啓夫氏と小沢昭一氏の往復書簡は研究・調査というのはどういうものかよく示している。小沢昭一『私のための芸能野史』（芸術生活社 昭48年、新潮文庫 昭58年）と併せて読むと、土地土地に埋もれた人材がいることや聞き書きの面白さを味える。小島貞二『漫才世相史』（毎日新聞社 昭40年）は該博な知識・見聞による、台本の事例を元にした変遷史である。今年1月27日新宿京王百貨店で催された福井県物産展の余興に出演した武生市の越前萬歳（野大坪萬歳）を大学院生の呉冬青君と大雪にもめげず見学に行った。新春に相応しい騒動とした古朴な芸能で今なお伝承されているのは驚きである。
- 2) 古態を留める萬歳のVTRは『大系 日本歴史と芸能』第12巻「祝福する人々」（平凡社 1990年）、レコード及びカセットテープは小沢昭一編『日本の放浪芸』第1巻「祝う芸——万歳さまざま」、テキストは岡田弘他編『大衆芸能資料集成』第1巻「祝福芸 I 萬歳」（三一書房 1980年）参照。
- 3) 拙稿「説経節の遠近^{おちこち}」「多摩のあゆみ」第80号（たましん地域文化財団 平7年）において説経節「^{おるかや}刈萱」の成立過程についての試案を述べたことがある。「多摩のあゆみ」誌は昨年第100号を刊行した多摩に関する総合的な研究誌で、

国立市の駅前の大学通り角のたましん国立支店5Fに歴史・美術館とともに編集室がある優れた地域研究誌である。無料なので、歴史・美術館ともども覗くとよい。

- 4) 佐々木義栄『佐渡が島人形ばなし』(同書刊行会 平8年)(同書の紹介は拙稿「書評 佐々木義栄『佐渡が島人形ばなし』」『一橋論叢』第117巻3号(平成9年3月))及び拙稿「佐渡の人形芝居」『国文学 解釈と鑑賞』第819号 至文堂 平成11年8月)。また語りの録音は法政大学「多摩の歴史・文化・自然環境」研究会編『日本文化の伏流——民衆芸能 説経節集』(法政大学多摩地域社会研究センター 1998年)にCDで霍間幸雄氏の「信太妻」第三段が収められている。
- 5) 拙稿「説経祭文の江戸期資料小考」『一橋論叢』第116巻第3号(平成8年9月)の年表参照
- 6) 同上23頁。『小栗判官の世界』の表紙絵参照。
- 7) 若松小若太夫「埼玉県西部の説経節資料について」『多摩のあゆみ』第80号、66頁。
- 8) 注(7)に同じく65頁。
- 9) 注(5)に同じく17頁。
- 10) 注(5)に同じく17頁。
- 11) 尾崎久弥『名古屋芸能史』8頁。
- 12) 注(5)に同じく34頁。
- 13) 拙稿「説経節の伝統」『一橋論叢』第97巻第3号(昭和62年3月)。
- 14) 拙稿「民衆文化の伝播と変容」『一橋論叢』第121巻第3号(平成11年3月)。
拙稿「説経節『小栗判官』の鬼鹿毛」『多摩のあゆみ』第95号(平成11年8月)。
付記 本稿は平成11年に文部省助成科学研究費補助を受けた研究成果の一部である。
記して御礼申し上げます。

(一橋大学大学院言語社会研究科教授)